

医薬ビジランスセミナーの開催にあたって

べっぴんく
別府宏樹



医薬品・治療研究会（TIP）代表、神経内科医、都立府中療育センター副院長

東京大学病院附属病院、都立府中病院、都立神経病院などの神経内科医としての診療活動の中でスモンを始めとする医原病患者と出会い、スモン訴訟原告団との関わりの中で独立・中立の医薬品情報の必要性を痛感した。1986年からTIP（The Informed Prescriber：邦題「正しい治療と薬の情報」）を発行、現在に至る。『P-drug マニュアル』（共訳）医学書院、『抗生物質治療ガイドライン』（翻訳監修）医薬ビジランスセンター発行など。

おはようございます。医薬品・治療研究会（TIP）主催者の一人としてごあいさつ申し上げます。

[KICADISのこと]

このセミナーは、医薬品・治療研究会と医薬ビジランスセンターが主催し、日本薬剤師学会、大阪大学医学部公衆衛生学教室、そしてJANCOCとの共催でもございます。朝早くから来てくださったみなさまがたの熱意に感謝いたします。このセミナーを開催するにあたって、18年前に開かれました、京都でのKICADISという薬害防止のための国際会議を思い出します。500人くらいを集めて、5日間にわたって非常に学際的な議論を繰り広げることのできた、画期的な会議だったと思います。日本の薬害、あるいは世界の薬害に対する運動をするにあたって、その時の人脈が今も続いていると思います。浜さんとわたくしとの出会いもこの会議でした。

しかし、一方で、先だって逮捕されましたミドリ十字社長の松下廉蔵さんも、このKICADISに参加していたのです。こうした事実は、この国が、薬害の構造そのものに対して、非常に不徹底な状態を続けてきたことの証拠でもあると思います。

願わくば、この会議が次の新しい時代を切り開き、二度と薬害を繰り返さないための、そういう会議になってほしいと思います。ビジランスのビジュルというのは、ラテン語の寝ずに起きているという意味、つまり見張り番とか警戒ということだと思いますが、薬の副作用はもちろん、医療のあり方、医療経済の問題、われわれが本当にいい医療サービスを受けられるかということも含めて、いつもきちんと目を光らせて、覚醒して見守って行かなければならない状況だ、ということだと思います。

しかし、時代に流されずに、常に、危機的な状況や問題点を見据えていくということは、非常に疲れることでもあります。ともすれば、自分たちの日々の生活や仕事の雑事に追われてそういうことに対する興味を弱める、あるいは失うことがある

と思います。そういう弱点を克服するための一番の手段は、知ること、だと思いません。われわれが、あることを知ること、知ることがさらに、疑問や怒りやあるいはそれを解決しなければという熱意を生み出すものだと思うのです。

[季布の一諾]

そういう意味で、この機会が非常に有効な場になることを望んでおります。最後になりますが、スライドを一つご紹介します。スモンのときに研究班の班長をされた甲野禮作さんの写真です。この方がエッセイをお書きになった、その内容をご紹介します。甲野さんはウイルス学者でしたが、中毒説が出たときに、それに対して非常に熱心に、臨床の医者がほとんど及びもつかないような熱意をもって、その原因を追求し、スモン訴訟ではスウェーデンから証人としてオ・レ・ハンソン氏をよぶ努力をなさいました。いろいろな中傷や誹謗もあった中でその任務を果たされた。彼がそのエッセイの中で、季布の一諾（きふのいちだく：一度承諾したことは千金にもかえがたい大事なものであり必ず守らねばならないことの意味）、という文を書いておられます。

史記という中国の歴史の本がありますが、その中で、季布という取り立てて特別なところのない少年だったのですが、人との約束を守る、そこが彼のいいところだった。ある日、嵐の日に、友達と約束をしていた。それを忘れずにその場所に行って、そのために流されてほとんど溺れ死ぬかというほどになった。やっと助かった彼は、約束を守ったということで周囲の人に非常に評価されて、彼はやがて政治の場に取り立てられて非常に大きな地位に就くのですが、甲野氏は、その時に、自分にとって、スモンの際の自分のしたことは、季布の一諾だった。自分にとって、やるべきことをきちんとやるということが大事だったし、そのことでウイルス学者としてウイルス説を否定し、スモンの病因を解明したこと、それは自分にとって非常に誇りである、とおっしゃっています。

われわれも、そういった、季布の一諾を求められる場面があると思いますが、大事なことは、絶えず、自分にとってこれは譲れないという場面に遭遇したとき、一歩も譲らず、明確な態度をとることが非常に大事なことではないかと考えます。

初めにお断りしておきますが、このセミナーには患者さんもおいでになっております。報道関係の方もおいでになっていると思いますが、プライバシーという点で十分に配慮していただきたいと思います。主催者としてお願いいたします。